

北会津村の産業經濟の方向は、勿論水稲・雜穀・蔬菜類の耕種農業をもつて發達してきたもので、俗にさえんばと呼ばれているように、会津若松市を主とし、坂下・高田・本郷などを市場として、集約的農業を育成してきている。村によっては、その扇状地の地形成因より畑作の方が卓越しているものもあった。

明治中頃より扇状地末端の北半、清水の湧出する、開田の早かった地域では、水田作に重点をおき始め、耕地整理事業を実施して、水田単作經營の傾向さえ示すものがあつた。

しかし上流の南半一、二〇〇町ほどは、扇央より扇頂に近く、表土も浅く、土地条件と水利系統の關係から、耕地の区画整理も困難で、停止の状態にあつた。下部に礫層をもつ雜木林が広がり、畑面積が一戸平均九〇アールも占め、麦、なたね、大豆、蔬菜を主とする經營形態をとつてきた村が多かつた。

終戦後、食糧事情が好転し、価格の変動もあつて、野菜作りが大きく伸びたが、米の政府保証による安定價格には、年による変動も激しく、追いつけない状態も生じていた。その当面の問題は勞力不足であつた。農耕を馬の畜力に依存して切りぬけ、一時は村で七〇〇頭にも達したことがある。ここへ小型發動機の生産、石油價格の低廉などで、機械が盛んに導入されてきた。これが今後の農業の動向となつて、基幹作物としてやはり米を主とし、関連作物として野菜をとりあげること、自立經營を目標とした協業組織体別を推進確立し、革新技術を積極的に導入・浸透させることが必至となつてきた。恐らく農業構造改善はこの方向をたどる村の動向として、大農機具を導入して、機械化農業を發達させるための、大圃場整備にせまられて計画されたものと思われる。

現在米の生産は農業所得の五五パーセントを占め、反収も平均四五五キログラムに達している。林業漁業をもたない当村としては、第一次産業の所得はあげて農業により、その大半を稲作に、他を野菜・雜穀の栽培に依存している。野菜の作付面積は二九〇ヘクタール、生産量は九、〇七〇トンで、品目は二〇種にも及んでいる。